

もらいっ子



おしかけっ子



ひろわれっ子

もらいっ子、おしかけっ子、ひろわれっ子

I なつき

我が家にキジトラのメス猫がやって来たのはまだ暑い日のことだった。届けてくれた里親ボランティアさんは、涙を浮かべてこう言った。

「ごみ集積場でね、か細いネコの鳴き声がしたんです。探してみると薄汚れた発泡スチロールの箱に何重にもひもが掛けられていて『開けるな』という紙まで貼ってあって。大急ぎで開けてみるとこの子が！でも、うちマンションだから今いる子以外飼えなくて。どうかどうかよろしくお願いします」

九月長月の「が」を取って「なつき」と名付けた。

なつきは、我が家にも少しづつ慣れ、あちこち走り回るようになった。とてもお行儀のいい子で、私の手を焼かせることはほとんどなかった。ただ困ったことに、ちょっと撫でようとするとうるさく噛みついてきた。だから、その頃の私の両手両腕は、いつも血だらけだったのだ。

「人間不信だよ、なつちゃん。一体どんな人に飼われてたんだろうねえ」

私は、ただただ元の飼い主に腹をたてながら、薬を塗っていた。なつきとのバトルは六か月以上も続いたけれど、今となってはまるで嘘のように、喉をなでると、すり寄ってくる。

「ただいまあ！」

外から帰った私を、なつきは玄関で迎えてくれる。そして、私の手の甲をふんふん嗅いでそっとなめる。鼻先と舌がちょっと冷たくてくすぐったい。

「まるで浮気チェックやね」

そう言いながら、なつきが家に上げてくれるのを待つのだ。

何かを感じてふと見ると、なつきが透き通った翡翠色の目でじっと私を見つめていることがよくある。

「ねえなつきさん、昨日買ったこのカップどうかしら？高かったけど、えいっと買ってしまったのよ」

「あらあ、とつてもおしゃれ。でもおばあさん、なんか辛いことがあったんですね」

「どうして？」

「だってこんなのを買う時って、いつも何かのストレス解消ですよ」

「なつきさんはすべてお見通しね。実はね……」

などと女談議ができそうな気がする。繊細で、ちょっとした音や緊張感でその場を離れ、黙って空を見上げている。何を思っているのだろうか。その後ろ姿が愛しいのだ。家族になってもう七年になる。「もらいっ子」なつきだ。

II ふみ

梅雨の晴れ間、庭先にガリガリに痩せた三毛の子猫があらわれた。じつとうずくまっていたが、そのうちどこかへ消えた。次の日、又やって来てすぐいなくなったが、草陰に置いたえさが、なくなっていた。朝、お皿に入れたえさを食べ、木の根元で眠る。そんな日がしばらく続いた。

「母ネコはどうしたのだろう？飼い主はいないのだろうか？」

薄汚れて痩せていく様子をハラハラしながら見ていることしかできなかった。少しずつお皿を部屋に近づけて、軒下に置くようになると、夜もそこで寝るようになった。愛くるしい寝顔を遠くから見ていた私の心は決まっていた。

「この子はうちの子になる！」

その日、えさのお皿を少しずつ家の中へ入れ、棧をまたいだ瞬間、窓を閉めた。ものすごく暴れたけれど、しばらくほっておくと疲れ果てたのか眠ってしまった。

翌日連れて行った病院で、先生はこう言われた。

「よかった！もう二日遅かったら命なかったかもしれないね。ダニもたくさんいるし」

七月文月にやってきたので「ふみ」と名付けた。ふみは、日毎に元気になり、天真爛漫に動き回るようになった。早食いで、のんびり食べているなつきのお皿に横から顔をつっこむ。そんなお転婆ぶりで家を賑やかにしてくれた。

ところが、その九月、事件は起こった。網戸を破って脱出してしまったのだ。

「ふーちゃん！ふーちゃん！」

毎日人目も気にせず探し回った。台風の夜には、吹き飛ばされそうな傘と懐中電灯を握りしめて歩き続けた。それと同時に、チラシを刷って近所に配ったりもした。

「なんだ、猫か！」

と、鼻で笑われたことも多かった。

「いやあ、うちも家出されたことあるんです。ご心配ですねえ。きっと見つかりますよ」

そう言って一緒に探してくれた方もいた。何も手につかず、溝を覗き込んだり、空き地に入ったりと、不審者まがいのことばかりして、時間だけが過ぎていった。知らない方から電話をもらい駆け付けたことも何度かあったが、ふみには出会えなかった。いろんな情報を集めると、どうも割と近くで楽し気に走り回っているらしい。

睡眠不足と食欲不振で私が倒れそうになった十日目の夕方、ふみが、なんと家の庭にちょこんと座っていたのだ！私はドキドキする胸をなんとかおさえ、家の電気を全部消すと、大好物のカニカマをテラスに置いた。ふみは、そろりそろりと部屋に近づき、飛び込んで来た。私は、勢いよく閉めた窓にもたれて号泣した。

それなのに半年ほどたった頃、また家出を決行したのだ。今度はノラたちにいじめられたようで、三日目の朝、ひと回り小さくなり激しく泣いるふみを隣の庭で見つけた。家出騒動はもうこりごりだと、毎年網戸を張り替えてもらっている。

ふみは愛くるしい容貌といびき轟音のミスマッチで笑わせてくれる。私を見つめ、膝に乗って来て大きな声で私に訴える。何だろう？文句かな？冒険はもう忘れたのかな？

「わたしね、ここの肩のどこ、もうちょっと白かったらよかったのにね、どう思う？おばあちゃん」

「ふーちゃんはそのままがかわいいよ。もうばっちりだよ」

そんな話ならいいのだけれど。

我が家の子になってはや五年、私のアイドル「おしかけっ子」ふみである。

III じゅん

お隣の庭でノラ猫が子を産んだ。ご近所の主婦で五匹保護して、手分けして飼うことになった。段ボールの箱に入れられた兄弟。みんなに踏みつけられ、えさもうまく食べられない子がいる。やせっぽちの茶トラだ。

「きっと気が弱い女の子やね」

そう確信して壊れ物のようにタオルで包んで、家に連れて帰った。すぐに、6月JUNEにうちの子になったから「じゅん」と名付けた。

最初こそ震えて小さくなっていたけれど、なつきやふみを追いかけてまわして嫌がられる程のやんちゃぶりを発揮した。なつきは毅然としたところがあるけれど、ふみはすっかりいじけてすみっこ暮らしを強いられてしまった。これは完全に騙された！詐欺だ！しかも男の子ではないか。

うっかりテーブルに出来た料理でも置いたら大変、あっという間に銜えている。その逃げ足の速さにはもう諦めるしかなかった。その上、いろんなどころでおしっこをする。一体どれだけの物を壊されたことだろう。傍若無人な振舞いのじゅんは、そのくせ、病院へ行けばぶるぶる震えて見る影もない。その内弁慶ぶりをなつきやふみに見せてやりたいと思う。今年のワクチン接種の時、先生が言われた。

「元気ですね。問題ないです。でももうダイエットは諦められたのですね」

飼い主の私は、小さくなって帰ってきた。

「じゅんちゃん！じゅん！」

今日も私の大声が響く。人間だったら、体育と給食の時間だけ元気な子にちがいない。

「ぐるぐるー」

猫とは思えない声を出して騒ぎまわっているじゅんは、何を話したいのだろう。

「ぼくな、ふーちゃんが好きやねん。でもふーちゃん、にげるねん。ぼくこまってんねん。おばあちゃん、どないしょ」

「好きな子追いかけまわしたらよけい嫌われるんよ。じゅんちゃんは素直なええ子やから、そこをアピールせんと」

うちの子になって三年が過ぎた。やんちゃで困りものだけど憎めない「ひろわれっ子」じゅんである。

IV 七五三

今年は我が家も「七五三」だ。と言っても飼い猫たちのことだけれど。神社へお参りするわけにもいかないが、どの子も元気で暮らしてほしいと願わずにはいられない。

「帰ったよ、さびしかった？」

私がドアを開ける音を聞きつけて、三匹が我先に迎えてくれる。おやつねだりとは分かっている、猫バカの私はえさの入った瓶を取り出してしまう。

できることなら其々の猫を看取ってから逝きたいものだ。そう思う今の私である。